

延長保育など多角的に保育を行っている施設を選び、多様な家庭が対象になるよう配慮した。調査場所としては、調査協力を得られた施設、全国 64 カ所の公立・私立保育園および 2 カ所の私立幼稚園、計 66 カ所である。調査場所リストは本稿末尾の資料編に掲載した。

3 調査期間

1998 年 12 月～1999 年 1 月である。

4 回収率および内訳

回収したアンケートは世帯数で 4,501 世帯（回収率 75.9%）、対象者数で 8,087 人（男性 3,734 人、女性 4,353 人）であった。世帯数の内訳は以下の通りである。なお、一人親世帯とは「現在結婚していない」と答えた例とした。

二人親世帯	3,922
一人親世帯（男性）	40
一人親世帯（女性）	521
不明	18
総世帯数	4,501

Ⅲ 結果と考察

1 対象の属性

回答者数は男性 3,734 名、女性 4,353 名であった（表 1-1 性別）。うち夫婦ともに回答が 3,586 組、2 人親世帯の男性のみ回答が 101 名、2 人親世帯の女性のみ回答が 235 名、1 人親世帯の男性が 40 名、女性が 521 名であった。婚姻関係が不明の単独回答者は男性 7 名、女性 11 名であった。全体の男女別集計には、以上のすべての回答者を含め以後、対象者と称す。

その他の属性については資料編に掲載した表 1-2～表 2-2 を参照されたい。

2 子育ての実態について

本項では、現在の家庭で乳幼児がどのように育てられているのかを報告する。また、対象者および子育てを取り巻く現在の生活実態を明らかにする。親世代との関係や価値観の継承に関する分析へと繋がる基礎データである。

2-1 子どもの健康と心配事

多くの対象者は、子どもの「からだやこころ」のことなどについて心配事を抱えながら子育てをしている

1) 子どもの健康状態

自分の子どもは「健康」であるとした対象者は男性 91%・女性 89%、「病気がち」は男女とも 6%、「長期にわたる医療や支援が必要」としたのは男性 3%、女性 4%であった。

「子どもは健康」と言えない人が全体の約 10%みられた。（表 2-3）

2) 子どもに関する心配ごとの有無

子どもに関する心配ごとについて「からだ」「こころや行動」「その他生活上のこと」の 3 項目を設定し、それぞれ「心配なことがある」「心配なことが少しある」「心配なことはない」の 3 選択肢から回答を得た（表 2-4）。「心配なことがある」「心配なことが少しある」の合計した各項目心配事ありの割合は以下の通りであった。

- 男性 41%・女性 48%が子どもの「からだのこと」について、心配ごとを持っていた。
- 男性 44%・女性 56%が「こころや行動のこと」について心配ごとを持っていた。
- 男性 40%・女性 49%が「その他生活上のこと」について心配ごとを持っていた。

ほぼ半数の対象者が子どもに関する何らかの心配ごとをかかえており、女性の割合が男

性よりやや高かった（図 1-1~1-3）。また、3項目中「心配なことがある」「心配なことが少しある」の6ヶ所どれかを1ヶ所以上選択した男性は62%、女性は74%であった。前項の設問で、自分の子どもは「健康」あるとした対象者は90%であったが、多くの対象者は子どもの体や心について心配事を抱えながら子育てをしていることが明らかとなった。

2-2 子どもとの関わり

1) 日常の子どもとの関わり方

多くの対象者が愛情を表現するなど好ましい養育行動をとっているが、関わりの内容は女性が男性より多様である。

子どもを養育する姿勢・養育行動の傾向を知る目的で、子どもとの日常の関わり方を8項目を設問し、「いつもそうする」「時々そうする」「あまりそうしない」「しない」の4選択肢から回答を得た。（表2-5）（図2）

全体の傾向としては、8項目中「いつもそうする」割合が男女とも最も高いのは、「5.抱きしめたり、かわいいといたり愛情表現をいつもする」で、男性50%・女性73%であった。ついで「8.家の中は、子どもが自由に安心して遊べるようになっている」男性50%・女性65%であった。一方、愛情表現をしなかったり、子どもと遊ばないと答えた対象者は各項目とも全体の1~2%であった。

全体に女性の「いつもそうする」と「時々そうする」と答えた割合が男性より高く、男性は「あまりそうしない」「しない」が女性より高かった。特に、以下の4項目は「いつもそうする」と答えた女性の割合が顕著に高かった（男女差12%~23%）。女性は男性に比べて、より多く、質的にも多様に子どもと関わっているといえる。

<女性の「いつもそうする」割合が男性より高かった4項目>

- 「2.子どもが何かができなくて困っている時は、励ましたりアドバイスする」男性31%・女性47%であった。
- 「4.子どもの話すことに耳を傾け、よく聴くようにしている」男性48%・女性60%であった。
- 「5.抱きしめたり、かわいいといたり愛情表現をする」男性50%・女性73%であった。
- 「8.家の中は、子どもが自由に安心して遊べるようになっている」男性50%・女性65%であった。

一方以下の3項目は、「いつもそうする」の割合が男女とも10%以下と低く、その差は小さかった。「時々そうする」は女性の割合がやや高かった。

<「いつもそうする」男女差の小さかった3項目>

- 「1.子どものやることは危なっかしいので、つい手を出したり口を出す」は男性8%・女性10%であった。
- 「3.親が決めた通りに行動するように、子どもに指示している」は男性8%・女性6%であった。
- 「7.汚したり散らかしたりするような遊びは、させないようにしている」は男性4%・女性2%であった。

<男女差のなかった項目>

- 「6.出来るだけ子どもと遊ぶようにしている」では、男女の差がなく、「いつもそうする」は男女ともに38%、「時々そうする」男性49%・女性51%であった。

このように、多くの対象者は子どもに対して、抱きしめるなどの愛情を表現したり、家の中を自由に安心して遊べるように配慮しており、乳幼児に対して好ましい養育行動をと

っているといえる。

養育行動によって男女差があったり、受容的でない養育行動をとる人がみられることの背景については、現在の生活環境との関連のみならず、個人差としての家族歴・親世代からの継承などとの関連を、本報告の他項で明かにしていきたい。

2) 子どもと過ごしている時の気持ち

男女ともに「子どもが可愛い」など肯定的感情をもつ人が多く、否定的感情は女性の時々もつ割合が男性より高かった。

子どもと過ごしている時に感じる気持ちを<肯定的感情>4項目と<否定的感情>4項目の計8項目について、「いつもそう思う」「時々そう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4選択肢から回答を得た。(表2-6)(図3-1、3-2)

<肯定的感情1~4>については「いつもそう思う」と「時々そう思う」の合計は次の通りである。

- 「1. 充実感がある」は男性 93%・女性 92%と同じ割合で高率であった。
- 「2. 楽しい」は男性 97%・女性 97%と同じ割合で高率であった。
- 「3. 面白いことや発見がある」は男性 95%・女性 98%といずれも高率であった。
- 「4. 子どもが可愛い」は男性 98%・女性 98%とほとんどの人が子どもは可愛いと感じていた。

<否定的感情5~8>については「いつも思う」割合は男女ともわずかであるので、「時々思う」割合を示す。

- 「5. つまらない」は男性 7%・女性 12%と女性の割合がやや多かった。
- 「6. 大変で、どうしたらよいかわからない」は男性 22%・女性 32%と女性の割合が多か

った。

- 「7. わずらわしくて、イライラする」は男性 29%・女性 48%あり、女性が多かった。
- 「8. 子育ての犠牲になっている感じがする」は男性 11%・女性 21%あり、女性が多かった。

肯定的感情の4項目については男女ともに、大半の人が「いつも」または「時々」感じしており、多くの人が子どもを過ごすことに対して肯定的イメージを持っているといえよう。しかし、「思う」程度には差が認められ、「1. 充実感がある」「2. 楽しい」は男性が、「3. 面白いことや発見がある」は女性が「いつも思う」割合がやや多かった。

否定的感情の4項目「5. つまらない」「6. 大変で、どうしたらよいかわからない」「7. わずらわしくて、イライラする」「8. 子育ての犠牲になっている感じがする」では「いつも思う」割合は男女とも非常に少ないが、「時々思う」は女性で12~48%の回答があり、男性に比べて割合が高かった。(図4)

以上、子どもと過ごしている時、ほとんどの人が肯定的感情を持っていたが、時には否定的感情を持つことのある人が、かなりの割合でいることが明らかになった。特に女性は、「6. 大変で、どうしたらよいかわからない」時々思う 32%、「7. わずらわしくて、イライラする」時々思う 48%など、男性に比べ否定的感情を持つことが多かった。これは、前項1)の「子どもとの関り方」から分かるように、女性が子どもにより多く関わっていること関連していると考えられる。

3) 子育てによる犠牲感について

何が犠牲になっているかでは、女性の方が多くのことが犠牲になっていると感じている

① 犠牲についてどのように思うか

前項 2) の「8. 子育ての犠牲になっている感じがする」の補遺設問「犠牲についてどのように思いますか」では、全体の 23% (男性の 17%・女性の 28%) から回答を得た。回答のあった 1,880 名 (男性 642 名、女性 1,238 名) をベースとすると、「犠牲感はあるが、苦にならない」が男性 55%・女性 47%、「しかたがないと思うので、がまんしている」男性 43%・女性 49%、「子育てをすることは限界にきている」男女ともに 1%未満であった。

(表 2-SQ6-1)

② 犠牲の内容

子育ての犠牲になっていることの内容は「どのようなことが犠牲になっていると感じますか」を複数回答で尋ねた。前問と同様に犠牲になっていると感じている対象者をベースとすると、「仕事や学業」男性 32%・女性 54%、「趣味や娯楽」男性 55%・女性 50%、「自由や気楽さ」男性 58%・女性 69%、「配偶者(パートナー)との関係」男性 19%・女性 14%であった。「仕事や学業」と答えた女性の割合が男性に比べ顕著に高く、女性全体 (3,821 名) からみると 15%に当たっている。また、「自由や気楽さ」は女性、「配偶者(パートナー)との関係」は男性の方が割合が高かった。複数回答選択件数は男性 1,066 件に対し、女性 2,361 件と女性が相対的に多くなっていた。

(表 2-SQ6-2)

子育ての犠牲になっていると感じている人のうち、約半数は「苦にならない」、約半数は「しかたがないのでがまんしている」と答えており、犠牲感のある人のほとんどは、自分の気持ちをコントロールしながら子育てに取り組んでいるといえる。しかし男女を比べると、女性は「我慢している」が「苦にならない」よりやや多く、男性は反対に「苦にならない」がやや多かった。また犠牲の内容につ

いては「仕事や学業」をはじめ、女性の方が多くの項目をあげており、女性が犠牲をがまんしている度合いは男性より強いといえよう。

2-3 子育てをしてからの自分自身の変化について

プラス面・マイナス面ともに女性が感じている割合が高かった。

子育てをして自分が成長したと感じる人がいるが、その場合の成長とはどのような内容であるのか。子育てが成人男女に及ぼす影響を明かにする目的で、「あなたは子育てをしてからの自分自身をどのように感じていますか」を尋ねた。10 項目について、「そう思う」「以前からそうなので、変わらない」「そう思わない」の 3 つの選択肢からそれぞれ 1 つの回答を得た。「そう思う」と答えた男女別割合を以下に示す。

- 「1. 考えが柔軟になった」男性 41%・女性 58%
- 「2. 他人の立場や気持ちがくみ取れるようになった」男性 40%・女性 62%
- 「3. 困難なことも運命的なこととして、受け止められるようになった」男性 36%・女性 56%
- 「4. 自分ではなくてはならない存在だと気づいた」男性 61%・女性 76%
- 「5. 物事に積極的になった」男性 21%・女性 33%
- 「6. ささいなことが気にならなくなった」男性 24%・女性 39%
- 「7. 感受性が豊かになった」男性 34%・女性 48%
- 「8. 思い通りにならないことがあることに気づいた」男性 40%・女性 59%
- 「9. 子育てに向いていないことに気づいた」男性 8%・女性 17%

- 「10. 子ども好きになった」男性 34%・女性 36%

すべての項目で女性の「そう思う」割合が男性より高かった。「子ども好きになった」を除いて、その差は 10%以上と顕著な項目が多い。逆に「以前からそうなので、変わらない」「そう思わない」は「子ども好きになった」を除いて、女性より男性の割合が高かった。子育てをしてから自分自身の変化は女性がより多く感じており、人としての成長と考えられるプラス面の変化を肯定している割合が男性より高かった。一方、子育てにとってはマイナス面といえる「子育てに向いていないことに気づいた」は女性の方が多かった。「子ども好きになった」を「そうは思わない」と否定した割合も男性 10%・女性 15%と女性が多く、女性はプラス面の変化を感じる一方、マイナス面もより多く感じていた。このことは前項 2-2-2)「子どもと過ごしている時の気持ち」と同様、女性がより子育てに関することとの関連が考えられる。(表 2-7)

2-4 子どもをもつことについて

子どもを持つ理由は、男女とも「楽しみ」が第 1 位である。予定子ども数・希望子ども数ともに女性が少なかった。

1) 子どもをもつ理由

子どもをもつ理由については、子どもとは対象者にとってどのような存在であるのか・子どもへの継承がどれくらい意識されているかを知る目的で 6 項目に限定し、「はい」「いいえ」いずれかの回答を求めた (表 2-8)。以下「はい」と答えた割合を示す。

- 「1. 子どもを生み育てることは、よい経験だと思うので」男性 76%・女性 89%
- 「2. 子どもを生み育てることは、男としてま

たは女としての自分の存在感が感じられるので」男性 62%・女性 65%

- 「3. 子どもに継承したいもの(技能や伝統など)があるので」男性 29%・女性 19%
- 「4. 子どもは楽しみやうるおいを与えてくれるので」男性 85%・女性 89%
- 「5. 子どもは活気があるので」男性 76%・女性 78%
- 「6. 子どもはほしくないが、大人として認められたかったので」男性 2%・女性 1%

男女ともに、70%以上の高い肯定率を示したのは「4. 子どもは楽しみやうるおいを与えてくれるので」、「1. 子どもを生み育てることは、よい経験だと思うので」、「5. 子どもは活気があるので」であった。「楽しみやうるおい」と「よい経験」で女性の肯定率がいずれも 89%ということが特徴であった。次いで、「2. 子どもを生み育てることは、男としてまたは女としての自分の存在感が感じられるので」が男女とも 60%台であった。子どもの存在が如何に男性として・女性としてのアイデンティティを支えているかを示す数字である。

「3. 子どもに継承したいもの(技能や伝統など)があるので」は男性 29%・女性 19%と多数派ではなかったが、男性が女性より高かった。

多くの人にとって、子どもは楽しみ・潤い・活気を与えてくれる存在であり、子どもを生み育てることはよい経験だとして、子どもの存在や子育ての意義が肯定的に評価されていた。女性は男性に比べ、より肯定率が高かった。継承したいもののためや、大人として認められたいという手段的な理由をあげた人は少数であった。

2) 予定子ども数

「2人」が最も多く男女とも 52%、「3人」が男性 27%・女性 25%、「1人」が男性 9%・

女性 13%であった。予定子ども数の平均値は男性 2.30 人・女性 2.21 人で男性が多かった。

(表 2-9)

第 11 回出生動向基本調査(国立社会保障・人口問題研究所)によれば、夫婦の予定子ども数全国平均は 2.11 人であるので、本調査対象は多い傾向がある。

3) 希望子ども数

「3人」希望が最も多く男性 43%・女性 45%、「2人」が男性 36%・女性 33%、「4人」が男性 5%・女性 8%であった。「本当はிரらない」としたのは男性 2%・女性 3%であった。本当はிரらないを 0 人として算出した希望子ども数の平均値は男性 2.72 人・女性 2.62 人であった。(表 2-10)

2-5 子どもの世話と家庭生活について

子どもの世話は祖父母に頼る比重が大きい。夫婦の家事分担率は低く、家庭生活の満足度は女性が低い。

1) 日中、子ども(乳幼児)の世話を主にしている人について

複数回答で設問し、世帯集計を行った。回答の多い方から、「保育園などの保育者」84%、「女性対象者自身」43%、「祖父母」17%、「配偶者(パートナー)」12%、「幼稚園の先生」7%の順であった。その他、ベビーシッターなどは 1%未満であった。(表 3-1)

2) 子ども(乳幼児)の世話を一時的にできない時、頼む相手について

「祖父母(自分または配偶者の親)」に頼む割合が、男性 71%・女性 76%と非常に高く、公的サービスに頼らない地縁・血縁による比重が大きかった。

公的なサービスとしては、今回の調査場所

の一部で行われている「一時的保育サービス」男性 14%・女性 14%などがあげられた。「ベビーシッター」は男性 3%・女性 4%、「頼める人がいない」は男性 3%・女性 4%にみられた。(表 3-2)

3) 家事の分担

「あなたの家庭では、家事をしているのはあなたですか」の設問では、女性が「自分がしている」と答えた割合が 78%、男性が「配偶者(パートナー)がしている」と答えた割合は 75%と、一致度はかなり高かった。「夫婦で分担を決めている」は男性 16%・女性 12%でやや男性が多かった。

1 世帯で男女両方の回答があった 3,586 組についてのみの集計では、女性回答「自分がしている」78%、男性回答「配偶者(パートナー)がしている」76%、「夫婦で分担を決めている」は男性 16%・女性 13%であった。本調査対象は共働き家庭が大半を占めるにもかかわらず、夫婦での家事分担が 12%程度しか進んでいない現状が明らかとなった。(表 3-3)

4) 配偶者(パートナー)との関係について

配偶者(パートナー)との関係や考え方について 5 項目を「はい」「いいえ」の選択設問とした(表 3-4)。ここでは、1 世帯で男女両方の回答があった 3,586 組についての結果を以下に示す。「はい」と答えた人の割合は以下の通りで、夫婦間でかなり一致していると考えられる。

- 「1. 私たちの子育てに関する意見は一致している」男性 68%・女性 71%
- 「2. 私たちは家族にとって大事なことを話し合っている」男性 73%・女性 72%
- 「3. 私たちはどちらかという協力しあっている」男性 82%・女性 81%
- 「4. 私たちは喧嘩をしたり感情をぶつけあ

うことがよくある」男性 52%・女性 53%

- 「5. 私たちはどちらかという仲のよい夫婦だ」男性 82%・女性 79%

「3. 協力しあっている」「5. 仲のよい夫婦」と答えた割合が男女とも 80%前後と高率で、夫婦関係は良好であるととらえている対象者が多い。「4. 喧嘩をしたり感情をぶつけあうことがよくある」は約半数みられるが、必ずしも関係性の悪さの表われとは言えず、コミュニケーションの一側面である場合もある。しかし、後述する子育て負担感のある対象者群では、「4. 喧嘩をしたり感情をぶつけあうことがよくある」の割合は男女とも高くなっている。

5) 現在の家庭生活の満足度

「現在の生活をどのように感じていますか」を「満足」「やや満足」「やや満足していない」「満足していない」の4段階で設問した。男性の満足度が女性より高く、女性は満足していないと答えた割合が男性より高かった(表 3-5)。

「満足」男性 46%・女性 33%、

「やや満足」男性 40%・女性 45%、

「やや満足してない」男性 9%・女性 16%、

「満足していない」男性 4%・女性 7%であった。

以上男女別集計結果から、多くの項目で男女の差が認められた。その中で、女性が男性より、多様な感情をもちながら、子育てを行っていることが明らかとなった。たとえば、「子どもが可愛い」といつも思う人は男女とも 80%を越えていながら、「煩わしくてイライラする」と時々思う女性は 48%であった。このような子育てに両義性があることは、女性がより強く感じており、犠牲をがまんしている割合も高かった。そして、家庭生活への満足度は女性が低く、予定子ども数・希望子

ども数、ともに女性の方が少ない結果であった。

2-7 現在の生活に満足していない群の子育て実態について

子どもに関する心配事が多く、子育てに負担感がある。夫婦関係は協調性・親密性が低く、夫婦仲がよいとした割合は 50%に満たない

対象者の現在の生活に関する満足感と子育ての関連を次の方法で検討した。「あなたは現在の生活をどのように感じていますか」(表 3-5)の設問で、「満足」または「やや満足」を選択した男性 3,215 名・女性 3,350 名の計 6,565 名を「現在の生活：満足群」、「満足していない」または「やや満足」を選択した男性 461 名・女性 967 名の計 1,428 名を「現在の生活：不満群」として集計を行った。

「現在の生活：不満群」を「現在の生活：満足群」と比較すると、以下の傾向が認められた。まず、不満群の男女別集計結果を示し、() 内には満足群を示した。

- ① 子どもに関する心配事がある割合が高かった。
 - からだのこと：男性 15% (9%)、女性 15% (9%)
 - こころや行動のこと：男性 16% (8%)、女性 24% (10%)、
 - その他生活上のこと：男性 17% (8%)・女性 20% (9%)。

特に女性に心配事を感じている人が多く、「心配事が少しある」を加えると、心配事がある女性の割合は「からだのこと」58%、「こころや行動のこと」70%、「その他生活上のこと」65%となり、こころや行動の心配が最も多かった。

- ② 養育行動は女性が干渉的な割合が多く、

- 男女ともに励ます・愛情表現をする・一緒に遊ぶなどの関りが少なかった。
- 「子どものやることは危なっかしいので、つい手を出したり口を出す」は女性の「いつもそうする」割合が 27% (10%) と多く、やや干渉的であった。
 - 「子どもの話すことをに耳を傾け、よく聴くようにしている」は「いつもそうする」が男性 41% (49%)・女性 54% (62%) と、男女とも「いつもそうする」が少なかった。
 - 「抱きしめたり、かわいいといたり愛情表現をする」は男性の「しない」と「あまりしない」の合計が 17% (8%) と多かった。女性同士では差がなく、愛情表現は両群とも 97% がしている。しかし、不満群は「いつもそうする」が 67% (75%) 少なかった。
 - 「できるだけ子どもと遊ぶようにしている」は「あまりそうしない」と「しない」の合計が、男性 20% (10%)・女性 16% (10%) と男女とも子どもと遊ぶことに消極的傾向がみられた。
 - 「家の中は自由に安全に遊べるようにしている」は「あまりしない」と「しない」の合計が男性 25% (13%)・女性 13% (6%) と男女とも多かった。
- ③ 「子どもと過ごす時の気持ち」は肯定的な感情を表す項目では、「いつもそう思う」と「時々そう思う」の合計が満足群・不満群ともに、また男女ともに、ほとんどの項目で 90% をこえており、「充実感がある」のみ不満群の男女が 80% 台であった。しかし、思う程度をみると、満足群は「いつもそう思う」の割合が、不満群は「時々そう思う」の割合が相対的に多かった。「いつもそう思う」の割合は次の通りである。
- 「充実感がある」男性 35% (53%)・女性 31% (48%)
 - 「楽しい」男性 45% (62%)・女性 41% (57%)
 - 「面白いことや発見がある」男性 38% (54%)・女性 52% (63%)
 - 「子どもが可愛い」男性 75% (86%)・女性 74% (84%)
 - 「子どもと過ごす時の気持ち」は否定的な感情を表す項目では、「いつもそう思う」割合は満足群・不満群ともに、また男女ともに、いずれの項目も 3% 以下であったが、「時々思う」は不満群が多かった。「時々思う」の割合は次の通りである。
 - 「つまらない」男性 15% (7%)・女性 22% (10%)
 - 「大変でどうしたらよいか分からない」男性 34% (22%)・女性 47% (30%)
 - 「煩わしくていらいらする」男性 40% (28%)・女性 61% (46%)
 - 「子育ての犠牲になっている気がする」男性 23% (11%)・女性 35% (19%)
犠牲については「がまんしている」が男性 17% (6%)・女性 25% (11%) と多かった。
- ④ 子育てしてからの自分自身の変化については、次のように、プラス面として肯定的に捉えている人が少なく、子育てにとってマイナス面といえる項目に「はい」と答えた人が多かった。
- <プラス面>
- 「考えが柔軟になった」男性 32% (43%)・女性 49% (61%)
 - 「自分がなくてはならない存在だと気づいた」男性 48% (63%)・女性 72% (78%)
 - 「他人の立場や気持ちが分かるようになった」男性 32% (42%)・女性 57% (63%)
 - 「感受性が豊かになった」男性 20% (36%)・女性 42% (50%)。
- <マイナス面>
- 「子育てに向いていないことが分かった」男性 17% (6%)・女性 29% (14%)
 - 「子どもが好きになった」に「そうは思わない」と答えた人が多かった。男性 15% (9%)・

女性 23% (12%)

- ⑤ 子どもを持つ理由では、6項目中4項目で、男女とも「はい」の選択率が低く、子どもを持つことに意義を感じる割合が少なかった。
- 「子どもを生み育てるのは、よい経験だと思うので」男性 68% (78%)・女性 78% (89%)
 - 「男として、女としての自分の存在感が感じられるので」男性 54% (64%)・女性 49% (65%)
 - 「子どもは楽しみやうるおいをあたえてくれるので」男性 79% (87%)・女性 65% (89%)
 - 「子どもは活気があるので」男性 66% (78%)・女性 57% (78%)
- ⑥ 予定子ども数と希望子ども数が少なかった。予定子ども数平均値:男性 2.25人(2.31人)・女性 2.10人(2.24人)、希望子ども数平均値:男性 2.61人(2.73人)・女性 2.47人(2.67人)であった。「本当はいろいろな」と答えた割合が、男性 5% (1%)・女性 6% (2%) と高かった。
- ⑦ 対象者が一時的に子どもの世話を出来ない時、世話を「頼める人がいない人」が女性 8% (3%) と割合が高かった。
- ⑧ 配偶者(パートナー)との関係はシングル(離別・死別・未婚)を除いた不満群の男性 445名および女性 800名と満足群の男性 3,194名および女性 3,014名を集計した。夫婦の親密さや協調性をあらかず項目は「はい」と答えた割合が男女ともに低い。
- 「考えが一致している」男性 34% (73%)・女性 39% (78%)
 - 「大切なことを話し合っている」男性 44% (78%)・女性 37% (76%)
 - 「協力し合っている」男性 59% (86%)・女性 48% (88%)
 - 「仲のよい夫婦だ」男性 47% (88%)・女性 37% (89%)

一方、「喧嘩をしたりや感情をぶつけあうことがある」は「はい」と答えた割合が男性 64% (50%)・女性 61% (50%) と男女ともに高かった。

- ⑨ 夫婦をで家事分担をしている割合は、男性は 16% (15%) と差がなかったが、女性では 7% (15%) と分担が少なかった。

現在の生活に満足していない群は満足している群に比べ、明らかな特徴が認められた。すなわち、子どもに関する心配事を多く感じていた、子どもとの関りでは、愛情表現が少ない・子どもの遊びの受容度が低いなどの傾向がみられた。また、子育てや子どもを持つことに意義を感じる割合が低かった。そして、特徴的であったのは夫婦関係であり、夫婦の協調性・親密性を示す項目すべてが不満群の割合が低いことであった。

2-7 子育てに負担感のある群について

子どもに関する心配事を多く感じており、自分は子育てに向いていないと感じている割合が高い

少子化の要因の一つに、子育て負担の問題があげられている。本調査で、特に子育て負担感の強いと思われるサンプルを抽出し、その特徴や背景を明らかにし、子育て支援策の資料を提供したい。

「子どもを過ごす時の気持ち」(表 2-6)の設問で、子どもと過ごしていて肯定的感情をもてない人、または否定的感情を持っている人を以下の方法で抽出し、「子育てに負担感のある群」として分析した。すなわち、肯定的感情 4項目「充実感がある」「楽しい」「面白いことや発見がある」「子どもが可愛い」で「そう思わない」、または否定的感情の 4項目「つまらない」

「大変で、どうしたらよいかわからない」「わずらわしくてイライラする」「子育ての犠牲になっている気がする」で「いつもそう思う」の計8ヶ所のどれか1つ以上を選択した男性 116 名（全男性の 3.1%）・女性 173 名（全女性の 4.0%）の計 289 名（全体の 3.6%）を抽出し、集計を行った。

子育てに負担感のある群を全体の集計結果と比較すると、以下の傾向が認められた。まず、子育て負担感のある群の男女別集計結果を示し、() 内には男女別全体集計結果を示した。

① 子どもに健康に関する問題があるとした人の割合が多かった。

- 病気がち：男性 9%（6%）・女性 10%（6%）、
 - 長期にわたる医療や支援が必要：男性 4%（3%）・女性 5%（4%）
- ② 子どもに関する心配事がある割合が高かった。
- からだのこと：男女とも 16%（10%）
 - こころや行動のこと：男性 16%（9%）、女性 29%（13%）、
 - その他生活上のこと：男性 20%（9%）・女性 26%（11%）。

特に女性に心配事を感じている人が多く、「心配事が少しある」を加えると、心配事がある女性の割合は「からだのこと」61%、「こころや行動のこと」73%、「その他生活上のこと」69%となり、こころや行動の心配が最も多かった。

③ 養育行動は以下のように、干渉的・指示的な割合が高く、励ます・愛情表現をする・一緒に遊ぶなどの関りが少なかった。

- 子どものやることは危なっかしいので、つい手を出したり口を出す：「いつもそうする」男性 19%（8%）・女性 27%（10%）
- 親が決めた通りに行動するように、子どもを

指示している：「いつもそうする」男性 22%（8%）・女性 15%（6%）、

- 子どもが何かできなくて困っている時は、励ましたりアドバイスする：「あまりそうしない」と「しない」合計で、男性 19%（8%）・女性 10%（2%）
- 抱きしめたり、かわいいといたり愛情表現：「しない」男性 10%（1%）・女性 4%（0.2%）、

●できるだけ子どもと遊ぶようにしている：「しない」男性 11%（1%）・女性 5%（0.3%）

④ 子育てしてからの自分自身の変化については、以下のように、プラス面として肯定的に捉えている人が少なく、子育てにとってマイナス面といえる項目に「はい」と答えた人が非常に多かった。

<プラス面>

- 自分がなくてはならない存在だと気づいた：男性 46%（61%）・女性 63%（76%）
- 感受性が豊かになった：男性 25%（34%）・女性 31%（48%）。
- 「子どもが好きになった」に「そうは思わない」と答えた人が多かった。男性 25%（10%）・女性 40%（15%）

<マイナス面>

- 「子育てに向いていないことが分かった」男性 32%（8%）、女性 49%（17%）

⑤ 子どもを持つ理由では、6項目中4項目で、男女とも「はい」の選択率が低く、「子どもは欲しくないが、大人として認められたい」のみが男性 10%（2%）・女性 5%（1%）と多かった。子どもを持つことに意義を感じる割合が少なかった。

- 「子どもを生き育てるのは、よい経験だと思うので」男性 60%（76%）・女性 78%（89%）
- 「男として、女としての自分の存在感が感じられるので」男性 54%（62%）・女性 49%（65%）
- 「子どもは楽しみやうるおいをあたえてくれ

るので」男性 66% (85%)・女性 65% (89%)

- 「子どもは活気があるので」男性 60% (76%)・女性 57% (78%)・

- ⑥ 予定子ども数と希望子ども数が少なかった。予定子ども数平均値：男性 2.26 人 (2.30 人)・女性 2.01 人 (2.21 人)、希望子ども数平均値：男性 2.59 人 (2.76 人)・女性 2.55 人 (2.70 人)であった。

「本当はいらない」と答えた割合が高い。男性 8% (2%)・女性 17% (3%)。

- ⑦ 子どもの世話を一時的に頼める人について、女性の回答でみると、「祖父母」65% (76%) などがやや少なめで、「頼める人がいない人」が 14% (4%) と割合が高い。

- ⑧ 配偶者 (パートナー) との関係はシングルを除いた男性 92 名および女性 131 名を集計した。夫婦の強調性や親密さをあらわす項目は「はい」と答えた割合が男女ともに低い。

- 「考えが一致している」男性 50% (68%)・女性 53% (70%)
- 「大切なことを話し合っている」男性 58% (73%)・女性 65% (72%)
- 「協力し合っている」男性 73% (82%)・女性 73% (81%)
- 「仲のよい夫婦だ」男性 72% (82%)・女性 68% (80%)

一方、「喧嘩をしたりや感情をぶつけあうことがある」は「はい」と答えた割合が男性 73% (51%)・女性 69% (52%) と男女ともに高かった。

- ⑨ 現在の家庭生活の満足度では、「満足していない」が男性 16% (4%)・女性 27% (7%) と多かった。

以上のように、子育てに負担感のある群には明らかな特徴が認められ、負担感の要因と思われる事柄がいくつか浮かび上がった。すなわち、子どもに関する心配事を多く感じて

おり、子育てや子どもを持つことにあまり意義を感じていなかった。特に、自分が「子育てに向いていない」と感じている男性は 32%・女性は 49%みられた。このような内面的な要因に加えて、子どもの世話を一時的に頼める人の不足や夫婦関係など、対象者を取り巻く環境要因が認められた。これらが現在の生活に関する不満感を高め、子どもへの関わり方や子育て負担感に密接に関連していると思われた。

2-8 子育て実態について 一小括一

子どもや子どもとの生活について、共働き世帯を中心に調べたところ、ほとんどの対象者は子育てに喜びや意義を見出し、順調に子育てを行っている様子が伺えた。しかし、男女とも約半数は子どもに関する何らかの心配事を抱えており、時には子どもや子育てに対して、「わずらわしい」「犠性感」など否定的な感情をもつ人も多かった。特に、女性は子どもとの関わりが男性より多い分、子どもや子育てに対する感情が多様で、より肯定的である一方、否定的な側面も見られた。また、昨年度の本研究報告で女性に家庭内のことに関するストレスが高い結果が得られたが、本調査では、女性の家庭生活に対する満足度が低い傾向がみられた。共働きにも関わらず夫婦の家事の分担が進んでいないことも一因と考えられたが、「現在の家庭生活に満足していない群」の検討を行った結果、夫婦の関係性の問題が重要な背景として浮かび上がった。

「子育てに負担感のある群」の分析においては全体との違いが明瞭であり、子どもに関する心配事を感じている割合が多いこと・「子育てに向いていない」と感じるなど子どもや子育てにあまり意義を感じていないこと・子どもの世話を頼める人が少ないことなどが明らかとなった。

以上の子育て実態の把握から、今後の育児支援策として、次の方向性を提示したい。

子どもに関する心配事を軽減することが第一義的に重要である。子どものからだに関する心配事については、健康相談などが支援の主軸となるが、本調査対象が主に共働き世帯であることを考慮すれば、当然、休日や夜間にサービスが提供されることが必要である。それが、養育者と子のニーズに応え、かつ有効に利用される施策であると言えよう。

最も多い心配事は「子どものこころと行動」に関することであった。子どもの発達に伴い養育者にとって、多少の心配事が生じることは不可避である。また、表面的な問題が解決しても、主観としての心配は解消されなかったり、些細なことがなんらかの原因によって心配が増幅される場合がある。これは、90%の人が「子どもは健康である」としながらも、約半数は心配事があるとしていたことから明らかである。その背景要因として、さまざまな理由で養育者が「現在の家庭生活に対する不満感」をもっていることと関連していると考えられた。それらをどう乗り越えて、あるいはどのように折り合いを付けて、実際の子育てに取り組んでいくか、主体である養育者が考え、実行に向けるためのサポートが必要である。特に、夫婦関係については今日的課題である。親子関係を軸にした家族観から、夫婦関係を大切にした家族観への転換が求められているのではないだろうか。

子育ては、長期に渡って命を育む営みであり、子どもを成熟した大人への発達を促す責を負っている。養育者が、さまざまな思いをもって行なっている子育てを側面から支えるためには、養育者の人としての成人期の発達を支え・促す視点が重要ではないだろうか。これが子育て支援におけるハードの提供のみならず、ソフトが必要なゆえんである。

次世代育成力を「社会領域」と「個人領域」

さらにそれぞれを「ハード」面・「ソフト」面に整理して考えると、これまでの少子対策は「社会領域」の「ハード」面の充実と「個人領域」の「ハード」面への援助が中心であったと言えるのではなかろうか。「ハード」面のますますの充実も重要であるが、今後の支援策として、社会の次世代育成力を高め、個人の次世代育成力を育てるソフトの提供が望まれる。

(齋藤幸子)

3 親世代との関係と、価値観の継承

対象者とその親世代の生き方に関する考え方と価値観について検討し、子育てにおいてどのような価値観が大切にされ継承されているのかを考察する。また、対象者の親の価値観などと、子どもである対象者の経済的・心理的自立性や子育ての状況との関連も考察する。

なお、限定質問では該当すべき対象について集計を行った。文中の集計対象者の記載であるが、対象者の男性および女性については男性・女性とのみ表記し、また、対象者あるいは配偶者の親を対象とする場合には親と表記した。

3-1 親世代との経済・心理的関係について

1) 親からの経済的援助と日常生活上の援助

対象者や配偶者の親が健在であるかどうか、そして親の年齢をたずね、対象者自身の親だけではなく配偶者の親からの援助の状態を検討した。今年度は、対象者の経済的・心理的自立性と子育ての状態や、子育ての考え方や価値観について分析を行った。対象者の親の多くは健在であり、対象者が親から何らかの経済的援助を受けている割合が約30%である。また、対象者の自立性と子育て、あるいは価値観については興味深い結果が得られた。

① 対象者と配偶者の親の健在と年齢

[親の健在]

- ・男女共に対象者の親が健在な割合は多く、男性の父親が健在73%・母親健在89%、女性の父親が健在79%・母親健在92%である。(表4-1-1、4-1-2)
- ・男女共に配偶者の親が健在である割合も多く、妻の父親が健在74%・母親健在88%、夫の父親健在65%・母親健在80%である。(表4-1-3、4-1-4)

- ・男女共に母親は健在な割合が多い。

[年齢]

- ・対象者の親の年齢は、男性では父親が59歳以下は18%、女性では父親が59歳以下は26%である。男性の母親が59歳以下は30%で、女性の母親が59歳以下の年齢は42%である。女性の母親は、若い年齢層の割合が高い。(表4-1-5、4-1-6)

② 対象者または配偶者の親からの経済的援助

[住宅費・金銭・生活費援助]

- ・親から住宅費援助・金銭的援助・生活費の援助などの経済的援助を受けているのは、男性では29%、女性では31%である。(表4-2)

- ・現在、対象者が独身(死別、離別など)で子どもとだけ住んでいる場合を、一人親核家族とするが、この一人親核家族(男性16例、女性387例)の対象者が親から何らかの経済的援助を受けている割合は、男性25%・女性22%である。女性の一人親核家族の場合は経済的援助を受けている割合が低い。

[経済的援助に対する感想]

- ・経済的援助を受けて「助かっている」と思っている割合は男性73%・女性76%である(表4-SQ2-1-)。女性の一人親核家族では92%の人が「助かっている」と思っており、その割合は高い。

- ・また、「親に対して申し訳ない」と思う割合は、男性53%・女性54%であり、「現状ではやむを得ない」と思う割合は男性43%・女性44%である。「親として普通のことをしてくれている(当たり前)」、あるいは「将来、親の世話や援助をするのだからこれでいい」と思う割合は約10%である。(表4-SQ2-2)

③ 対象者または配偶者の親からの日常生活の援助(経済以外の援助)

[日常生活の援助]

- ・親から「身の回りの世話や家事や育児を助けてもらっている」割合は、男性49%・女性54%である。女性の方が、日常生活の援助をしてもらっていると受け止めている割合が高い。(表4-3)
- ・女性の一人親核家族の場合は、51%が親から日常生活の援助を受けている。

[日常生活の援助に対する感想]

- ・親の援助があり「身体的に助かっている」割合は男性85%・女性89%で、「精神的に助かっている」割合は男性84%・女性87%であり、「助かっている」と思っている割合が男女共に高い。(表4-SQ3-1)
- ・親に対して「申し訳ない」と思う人は男性43%・女性46%であり、女性の方が「申し訳ない」と思っている割合が高い。「親が喜んでやってくれているから」という思いで受けとめている人は男性37%・女性30%であり、男性の割合が高い。(表4-SQ3-2)

③ 親に対する経済的・精神的・日常生活・介護などの援助

- ・対象者が親に援助している状況であるが、「経済的に助けている」割合は男女共に17%、「心配事を聞き精神的に助けている」割合は男性39%・女性55%、「日常生活を助けている」割合は男性12%・女性18%、「看病や介護」をしている割合は男女共に6%である。女性の方が精神的に助けたり世話をしている割合が高い。(表4-4)

対象者の親の多くは健在である。女性の母親の年齢層が若いので、育児や生活上援助などが受けられやすい背景があるのではないかと推察される。

乳幼児を持つ対象者が、親から何らかの経済的援助を受けている割合は、約30%である。女性の一人親核家族の場合は、経済的援助を

受けている割合が対象全体の女性と比べ低い傾向がある。

育児や家事などの世話を親に頼らざるを得ない状況があるので、日常生活上で親から援助を受けているのである。そして、乳幼児を持つ親は「現状ではやむを得ない」と思いながら援助を受けている。

経済的あるいは日常生活の援助を受けていることに関して、男性は「親が喜んでやってくれているからいい」と思う割合が女性と比べ高い傾向がある。しかし、女性は「申し訳ない」、あるいは「現状ではやむを得ない」と思う割合が男性と比べ高い傾向がある。

成人期の親子関係においては、親が自分は頼りにされているという感じがもてること、そしてその親の気持ちを成人した子どもが受容できるというあり方が多くみられる。この意味においては、男性は親が喜んでやってくれていること素直に受け止めており、親子関係がよい状態にあるともいえる。しかし、男性には日常的世話を親にしてもらって当たり前という考えがあり、男性中心のイエ制度の残滓があると考えられる。また、対象の男性の多くは本来自分を負うべき育児や家事などの家庭生活責任をとっていないので子育てや生活の実態が理解できず、親の援助の意味を理解しにくいのではないだろうか。

親にとって成人した子どもの援助をしていることが、親自身の自尊心を満足させる範囲を越え、負担になっていることもあるのではないだろうか。成人が親の援助なしに生活できないとすれば、社会の仕組みとしては必ずしも健全なあり方とはいえない。

2) 対象者自身の親との心理的關係

昨今は、青年あるいは成人においても親離れ・子離れが出来にくいのではないかとわれている。今年度は、対象者とその親との心理的關係を検討し、対象者の子育てにどの様

な関係があるのかを検討した。

対象者の多くは、対象者自身の両親から信頼され見守られている。しかし、女性は母親に依存的な割合が高い。また、母親が子どもである対象者に依存的であったり指示的である割合が高い傾向がある。母親と娘である対象者がお互いに依存しあっていると考えられる場合には、その娘である対象者は自分の子どもの状況を的確に把握することが不得手なことがある。

① 対象者とその父親との関係

[対象者が父親に依存的]

- ・「父に愚痴や心配事を聞いてもらう」ことがく当てはまる・やや当てはまる人の割合は、男性9%・女性17%である。(表4-5-1)
- ・「行動を決める場合に、父にアドバイスをしてもらう」ということがく当てはまる・やや当てはまる人の割合は、男性12%・女性18%である。(表4-5-2)
- ・「愚痴をきいてもらう」という男女の約半数以上は、父親に「アドバイスをしてもらう」という教育的援助も求めている。このように、「愚痴を聞いてもらい」そして「アドバイスをしてもらう」という人の割合は、男性5%・女性10%である。

[父親が指示的]

- ・「何をなすべきか・どのようになすべきかを指示している」ことがく当てはまる・やや当てはまる人の割合は、男性17%・女性23%である。男女比では女性の父親の方が指示的な割合が高い。(表4-5-4)

[父親は気遣って見守ってくれる]

- ・「行動に口を挟まないが、気遣ってくれる」という、対象者を気遣い見守られていることがく当てはまる・やや当てはまる人の割合は、男性60%・女性70%である。男女比では女性の方が見守りを受けている割合が高い(表4-5-3)。また、

父親の見守りのある男女の場合は、父親が指示的な割合が対象全体に比べ低い(男性13%、女性20%)。

[父親が対象者に依存的]

- ・「父親が相談事を持ちかけてきたり愚痴を言ったりして頼る」ということがく当てはまる・やや当てはまる人の割合は、男性15%・女性14%である。(表4-5-5)

対象者の多くは父親から見守られており、心理的に父親離れ・子離れが来ていると考えられる。しかし、父親と子どもある対象者がお互いに依存的で父親離れも子離れもできていないと考えられる割合は、男性0.6%・女性0.4%である。また、父親が指示的である場合が約20%あり、成人している対象者をコントロールしている父親の割合は低いとはいえない。

② 対象者とその母親との関係

[対象者が母親に依存的]

- ・「母に愚痴や心配事を聞いてもらう」ことがく当てはまる・やや当てはまる人の割合は、男性17%・女性68%である。(表4-5-1)
- ・「行動を決める場合に、母にアドバイスをしてもらう」ことがく当てはまる・やや当てはまる人の割合は、男性10%・女性45%である。(表4-5-2)
- ・「愚痴をきいてもらう」という男女の約半数以上は、母親に「アドバイスをもらう」という教育的援助も求めている。このように「愚痴を聞いてもらい」そして「アドバイスをもらう」という人の割合は、男性8%・女性42%である。

[母親が指示的]

- ・「何をなすべきか・どのようになすべきかを指示している」ことがく当てはまる・やや当てはまる人の割合は、男性18%・女性42%である。男女比では女性の親が

指示的である割合が高い。(表4-5-4)

[母親は気遣って見守ってくれる]

- ・「行動に口を挟まないが、気遣ってくれる」ことがく当てはまる・やや当てはまる>人の割合は、男性64%・女性75%である。男女比では女性の方が見守りを受けている割合が高い(表4-5-3)。また、母親の見守りのある男女の場合は、母親が指示的な割合が対象全体に比べ低い(男性14%、女性32%)。

[母親が対象者に依存的]

- ・「母親が相談事を持ちかけてきたり愚痴を言ったりして頼る」ことがく当てはまる・やや当てはまる>人の割合は男性35%・女性59%であり、母親が娘である対象者に依存的である割合が高い。

(表4-5-5)

[母親と娘である対象者が母親離れ・子離れが出来きていない場合]

- ・「母に愚痴を聞いてもらう」・「母は指示する」・「母は私を頼っている」という項目ですべてにく当てはまる>とし、母親と娘である対象者が心理的に母親離れ・子離れが出来きていないと考えられる153例について、その女性の子育ての状況を検討した。
- ・子どもの「からだや、こころや行動」について心配があるという人の割合は、「からだ」について16%、「こころや行動」について20%である。子どもの心身を心配している割合は、対象全体の女性と比べ低い傾向がある。
- ・子どもとの日頃の関わりでは、「子どものやることは危なっかしいので、つい手を出した口をいつもだす」という割合は20%である。対象全体の女性と比べその割合は高い傾向がある。
- ・子どもと過ごしているときの気持ちでは、「大変でどうしてよいかわからないこと

がいつもある」という割合が5%であり、対象全体の女性と比べその割合が高い傾向がある。

対象の多くは母親から見守られており、男性は心理的に母親離れができていると考えられる人の割合が高い。しかし、女性の場合は母親に依存的な人の割合が42%と高く、心理的に母親離れできていない人の割合が高い。

父親に比べ母親の方が子どもである対象者に依存的であり、母親の子離れが出来ていない割合が高い。そして、母親と子どもである対象者がお互いに依存的で母親離れも子離れもできていないと考えられる人の割合は、男性1%・女性11%である。また、成人している女性の対象者を指示しコントロールしている母親の割合も高い。

母親と娘である対象者が母親離れ・子離れが出来ていない場合に、その娘である対象者は子どもの状態を適切に把握することが出来なかつたり、関わりが不十分なこともある。

母親が指示的で過保護な育て方をされていると、子育てをする時に状況判断などが不得手であったり、適切な関わりがわからないということも考えられる。

子育てが負担になっている親や、子育てなどで困っている親の場合には、育ってきた環境なども子育てに関係していることがあるので、子育て中の親を支援する時には、親の背景を理解していくことが大切である。

3-2 育ってきた環境

離家の年齢と精神的自立、あるいは親の単身赴任による家庭環境の変化の経験などが、対象者の親子関係および現在の子育てにどのような影響があるのかを今年度は検討した。また、育った家庭に対する満足感と子育てについても検討した。

1) 一人暮らしの経験

中学卒業後、親と1年以上離れて一人暮らしをした経験があるかについて検討した。対象者は就学あるいは就職によって親元を離れた経験のある人が多いといえる。中学卒業後3年間以上一人暮らしの経験のある人は、経済的にも心理的にも自立している傾向がある。

- ・一人暮らしの「経験のある」人の割合は、男性62%・女性46%である。(表5-1)
- ・親と離れて一人暮らしを始めた年齢は、15歳から19歳が多く、男性64%・女性66%である。その期間は3年以上が多く、男性72%・女性63%である。(表5-SQ1-1, 5-SQ1-2)

① 一人暮らしの経験のある人の親との経済的・心理的關係

- ・一人暮らしの経験が3年以上の人について検討した。現在、親から「住宅費などの経済的援助」を受けている人の割合は、男女共に21%であり、一人暮らしの経験のない人と比べ親から経済的援助を受けている人の割合は低い。
- ・親から「日常生活上の援助」を受けている割合は、男性47%・女性46%であり、一人暮らしの経験のない人と比べ、親からの援助を受けている人の割合は低い。
- ・父親との心理的關係であるが、「父親に愚痴を聞いてもらう」割合は男性5%・女性12%、「アドバイスを受けている」割合は男性7%・女性12%であり、一人暮らしの経験のない人と比べ父親に依存している割合は低い。
- ・母親との心理的關係では、「母親に愚痴を聞いてもらう」割合は男女ともに12%であり、「アドバイスを受けている」のは男性7%・女性12%である。一人暮らしの経験のない人と比べ母親に依存している割合が低い。
- ・指示的な父親・母親の割合も男女共に低

い傾向がある。父親・母親が成人している対象者に気遣っている割合は高い傾向がある。

- ・一人暮らしの経験が3年以上の人は、親から経済的にも心理的にも自立している割合が高い傾向がある。

② 一人暮らしの経験のある人の子育て

- ・一人暮らしの経験が3年以上ある人について検討した。男性は、自分の子どもに対して散らかす遊びをあまり制限しない人の割合が48%であり、一人暮らしの経験のない人と比べ遊びを制限しない割合が高い傾向がある。

2) 小・中学生時代の親の長期不在

小・中学校時代の親の仕事などによる長期不在という家庭環境の変化が、現在の子育てなどにどのような影響があるのかを検討した。

対象者が小・中学時代に、親が長期に不在だった人の割合は約12%である。親の不在と親との心理的關係について検討したが、父親が不在だった経験のある女性の場合は、母親が娘である対象者に心理的に依存している傾向がある。

- ・対象者の「父親が不在だった」割合は男性9%・女性10%で、「母親が不在だった」割合は、男女共に1%である。「両親が不在だった」割合は男女共に1%である。父親が不在だったことを経験している割合は、男性10%・女性11%である。母親が不在だったことを経験している割合は、男女共に2%である。(表5-2)
- ・「父親が不在だった」ことを経験している人のうち、その期間が通算3年以上の割合は男性で35%、女性で39%である。(表5-SQ2-1)
- ・義務教9年間の約1/3以上の期間、父親が不在だった経験をしている割合は、対象全体では男性3%・女性4%である。

- ① 父親が長期不在だった対象者の親との経済的・心理的關係
- ・父親が3年以上不在だった経験のある対象者について、親からの経済的援助を検討した。男女共に結果は対象全体とほぼ同傾向である。
 - ・親との心理的關係を検討したが、父親が不在だった経験をしている女性の場合は、母親に「愚痴を聞いてもらう」ことがく当てはまらない>割合が31%であり、「母にアドバイスをしてもらう」ことがく当てはまらない>割合は52%である。父親が不在でなかった人に比べ、母親に依存的な女性の割合は低い傾向がある。
 - ・母親が娘である対象者に依存している割合は22%であり、父親が不在でなかった人に比べ、母親が子離れ出来ない割合が高い。母親は夫が不在だったので、娘である対象者を頼りにして生活していたことが現在も続いているのではないかと推察する。
- ② 父親が長期不在だった対象者の子育て
- ・男性の場合は、子どもと「一緒に遊ぶ」ことをいつもそうするという割合が34%であり、父親が不在でなかった人に比べその割合が低い傾向がある。

2) 対象者が育ってきた家庭

育ってきた家庭についての満足感と現在の子育てについて検討した。育ってきた家庭について不満に思っている女性は約1/4あり、決して少なくはない。また、子育て負担感のある群では、育ってきた家庭に不満に思う割合が対象全体に比べ高い。

育ってきた家庭に不満のある女性は、自分子どもを可愛いと思っはいるが、時には子どもを受容できなくなることもあり、子どもに対して両価的な感情がある。育ってきた家庭のあり方が現在の子育てに何らかの影響

を与えていると考えられる

- ・育ってきた家庭に「満足、あるいはやや満足している」割合は男性78%・女性74%であり、多くの人は満足している。だが、「不満、あるいはやや不満」に思っている割合は男性19%・女性24%で、男女比では女性の方が不満に思っている割合が高い。(表5-3)
 - ・子育て負担感のある群では、育ってきた家庭に「満足、あるいはやや満足している」割合は男性67%・女性63%である。また、「不満、あるいはやや不満」に思っている割合は、男性29%・女性33%であるが、対象全体の男女比では不満に思っている割合が高い。
- ① 育ってきた家庭に不満を持っている対象者の子育て
- ・育ってきた家庭に不満を持っている人を不満群とする。不満群の子どもとの関わりを検討すると、女性では「つい手を出したり口を出す」ことをいつもする割合が13%、「子どもの話を聞く」ことをいつもする割合は54%、そして「愛情表現をする」をいつもする割合は69%である。これらのことを不満のなかった女性と比べると、不満群の女性は干渉的傾向がある。また、肯定的な関わり合いの割合がやや低い傾向がある。不満群の男性では「子どもと遊ぶようにしている」ことをいつもしている割合は31%で、不満のなかった男性に比べ子どもと遊ぶ割合が低い。
 - ・不満群の子どもと過ごすときの気持を検討すると、女性では「煩わしい」といつも思う割合が57%、「子育ての犠牲になっている」と時々思うが28%で、不満のない女性に比べその割合が高く、他の項目でも肯定的な感情の割合が低い傾向がある。しかし、「子どもが可愛い」とい

つも思う割合は74%でありその割合は高い。不満群の男性も「煩わしい」と時々思う人の割合が37%で、不満のない男性に比べその割合が高い。

- ・育った家庭に不満のある女性は自分の子どもは可愛いと思っているが、子どもを受容できないこともある。
- ② 一人暮らしの経験が3年以上ある人の育ってきた家庭についての満足感
- ・一人暮らしの経験のある女性の場合は、育ってきた家庭に「不満、あるいはやや不満」の割合は29%である。また、育ってきたような家庭を築きたいかということでは「そう思わない、あるいはややそうは思わない」割合が44%で、一人暮らしの経験のない人に比べ育ってきた家庭に満足していない割合が高い。

3) 将来、育ってきた家庭のような家庭を築いていきたいと思うかについて

育ってきた家庭をモデルにして自分の家庭を築いていきたいかと設問したのは、育ってきた家庭を一応肯定していてもモデルにはならない場合があり、親の家庭観と子どもの家庭観が異なるという実態をみるためである。

対象者の多くは育った家庭に満足していると回答しているが、育ってきた家庭をモデルにしたくないという人の割合が少なくはない。子育て負担感のある群では、育ってきた家庭をモデルにしたくない割合が高く、家庭に問題があったのではないかと考えられる。

- ・育ってきた家庭のような家庭を築きたいと「そう思う、あるいはやや思う」割合は、男性60%・女性59%で、「やや思わない、あるいはそう思わない」割合は、男性35%・女性39%である。(表5-4)
- ・子育て負担感のある群では、育ってきた家庭のような家庭を築きたくないという

人の割合は、男性45%・女性47%である。対象全体の男女と比べその割合が高い。

3-3 生き方に関する考え方と価値観の継承

現代においてはどのような考え方や価値観が生き方では大切にされているのか、また、それらが世代間でどの様に継承され、あるいは変化してきているのかについて検討した。

考え方と価値観に関する観点については前述の調査内容に記した。39項目の質問を作成し5件法で調査をした。対象者自身の父親や母親は「どのような生き方や態度を大切にしていたと思うか」と、対象者に回答してもらい、また、「次の世代にどのような生き方や態度を大切にしたいと思うか」と対象者に設問をした。

分析対象は、39項目全問に回答したもので男性2504例・女性2849例である。そして、男女別(表6)、育った家庭に不満を持つ群、そして子育て負担感のある群について検討をした。

対象者の親が大切にしていた考え方や価値観は、「不正等を許さない規範性と、自分の言動に責任をもつこと、そして経済的に精神的にも生活面においても自立的に生きること。また、家庭にあっては、親を大切に子どもを慈しむ」ことである。

対象者も親の価値観を次の世代に大切にしたいと考えており、子育てにおける価値観は継承されていることが認められた。

しかし、対象者が次の世代に大切にしたいと思う内容には、親世代とは異なる価値観がある。それは、「家族との暮らしを大切にすること。そして夢と理想をもって生きること。人の気持ちがわかり人間関係を大切に、何よりも生活は楽しく」ということである。

育った家庭に不満のある人や子育て負担感のある人の場合には、対象者の親が家庭生活

を大切にしていなかった傾向が認められた。

1) 男性対象者の価値観について

① 男性の父親が大切にしていた価値観

- ・男性が自分自身の父親に<当てはまる>とした平均得点1.0以上の項目は5項目である。それは、「不正や悪いことを許さない 1.34」・「自分の親を大切にする 1.19」・「経済的・精神的・生活面において自立する 1.19」・「自分の言動に責任を持つ 1.17」・「自分の子どもを慈しむ 1.08」である。
- ・<当てはまらない>項目は、「成り行きにまかせる -0.23」・「信仰心を大事にする -0.16」の2項目である
- ・男性の父親の考え方や価値観は、「規範・責任感・自立性という社会性や、親を大切にそして子どもを慈しむ」ことである。

② 男性の母親が大切にしていた価値観

- ・男性が自分自身の母親に<当てはまる>とした平均得点1.0以上は13項目である。「不正などを許さない1.38」・「親を大切にする 1.38」・「子どもを慈しむ 1.34」・「家族の支え合いを大切にする 1.15」・「人の弱さや痛みを気づかうことができる 1.15」・「言動に責任を持つ 1.13」・「子どもとの暮らしを大切にする 1.13」・「忍耐強い 1.08」・「人との調和を重んじる 1.04」・「生活は楽しく1.02」・「自立する 1.01」・「配偶者との関係を大事にする 1.01」・「人の気持ちが分かる 1.0」である。
- ・<当てはまらない>項目は、「成り行きにまかせる -0.13」・「論理的思考を大切にする -0.05」の2項目である
- ・男性の母親と父親の価値観は同傾向を示し、「規範・責任感・自立性という社会性や、親や子どもを大切にする」ことである。母親には父親と異なる価値観があ

り、それは「家族の協力、そして子どもや配偶者との暮らしを大切にすること。また、人に対する気遣いや気持ちの理解などを大切にしている」ことである。

③ 男性が次の世代に大切にしたいと思う価値観

- ・男性が次の世代に大切にしたいと思う項目で、<当てはまる>とした平均得点1.0以上は24項目である。よく当てはまると考えられる得点1.5以上は6項目である。「生活は楽しく 1.65」・「言動に責任を持つ 1.59」・「子どもを慈しむ 1.56」・「配偶者との関係を大事に 1.54」・「人の弱さや痛みを気づかう 1.53」・「不正などを許さない 1.52」である。また、他にも得点の高かった項目は、「家族の支え合い・協力 1.47」・「夢を持つ 1.47」・「人の気持ちが分かる 1.46」・「親を大切にする 1.43」・「子どもとの暮らしを大切に 1.43」・「自立する 1.43」で、多くの項目で得点が高い。「生活は楽しく」という価値観が最高得点であった。
- ・<当てはまらない>とした項目は、「成り行きにまかせる -0.17」・「信仰心を大事に -0.16」の2項目である。
- ・男性が次の世代に大切にしたいと思っていることには、男性の父親や母親が大切にしていたと思われる考え方を含んでおり相関が高い。男性の価値観と父親の価値観の相関係数は0.767、同様に男性の価値観と母親の相関係数は0.754である。(表7)
- ・男性の父親や母親からの継承と考えられる主なことは「不正等を許さない規範性、言動に責任をもつこと、そして経済的にも精神的にも生活面においても自立的に生きること。また、家庭にあっては、親を大切にそして子どもを慈しむ」ことである。